

人称代名詞youとweが内包するもの —アメリカ文学の小説世界の語りの事例から—

The Report on the Connotation of Personal Pronouns : 'You' and 'We' in the English Discourse —Through the Analysis of 'You' and 'We' Samples which Appear in the 'Narrative' of Modern American Novels—

佐藤 雅之*
SATO Masayuki

要 旨

本研究の目的は、英語の人称代名詞youとweが小説のテキストのdiscourseの中で、どのようなニュアンスの下に使われているのかについて検討することとおして、その内包する意味合いを考察することである。

検証する小説は、現代アメリカ文学のWilliam FaulknerとJ.D.Salingerの作品から1編ずつ選んで、the point of view など、物語の「語り」の構造に目を向け、ネイティブが持つyouやweのニュアンスを掘り下げる。その際、日本語と英語の「文構造の違い」についても併せて視座とする。

Abstract

This report aims at analysis of the native nuance or connotations of English personal pronouns: 'you' and 'we' through the review of how the two personal pronouns are used in the novel text discourses. The samples of 'you' and 'we' are from the narrative of modern American novels by William Faulkner and J.D.Salinger.

The analysis will be made through noticing not only the point of view in the story, but also the differences of sentence structures between English and Japanese.

キーワード：一人称代名詞we 二人称代名詞you 総称代名詞 一般論 ニュアンス 語り 小説の視点 文構造の違い
keywords : the first person : 'we' the second person : 'you' generic person generalization connotation narrative
the point of view in the story the differences of sentence structures between English and Japanese

I 本研究の目的と課題の所在

0 はじめに

(1) 学生の英語の「やり取り」における主語の現れ方について

昨年の2019年度、必修の一般教養科目英語 I・IIで教育学部4専攻の計150名あまりに、英語で継続して「話すこと（やり取り）」を行う技能を身に付けさせるべく、「沖縄か北海道か、いずれの地が高校生の修学旅行の目的に相応しいか」を論題とした、英語による簡易なMini-mini debateを行わせた。

一般論を英語で述べる場合には、「一般の人々」を主語を立てることが必要となって来るが、「debateでこちらの推奨する地について、相手にも納得・同感してもらおうよ述べるのだから、weよりyouの方が適している」と予め指導しておいた。

さて、修学旅行の候補地として北海道と沖縄の両地のいずれか側に立って、その推奨する各項目につ

いて英語で述べ合うdebateがいよいよ始まったが、teamの大半が、論戦が白熱するにしたがって、youを使わずweで自分の推奨地について「ここが眺めがよい。これが美味しい」などと、相手に向けてdebateを展開したのである。

(2) 学生が英語のdebateで一般論を述べる際、weを用いる理由

学生たちが論争の途中で自然とyouではなくweを主語に選んだ理由を検討してみると、まず、このdebateのフォーマットにあるであろう。

すなわち、debateにおける英語のやり取りを継続させる際の留意点として、相手が述べた内容を一旦You said, "...”と繰り返させることで相手の発言に対する、聞き手の集中力を維持させるとともに、その聞き取りの確からしさを担保するようにした。

また、相手の発言を繰り返した上で、自分の意見を述べるという、このフォーマットによって、互い

に論点をかみ合わせて、debateの論理的な継続性を確保したのである。

したがって、英語がやり取りされる展開中、相手が述べた内容を一旦You said,“...”と繰り返す際に、相手側を指すyouを主語として使わざるを得ないフォーマットの制約のため、自分の側の主張を一般論として述べる際に再びyouを使うことは、却って論理の混乱を招くように感じたのかもしれない。

(3) 英語で一般論を述べる際に用いられるyouやweに対する居心地の悪さ

しかし、果たしてそれだけの理由なのか。例えば、

“I (We) think Okinawa is better than Hokkaido because in Okinawa it is much warmer than in Hokkaido and you can be lightly dressed while traveling.”

という主張に対し、

“You said that it is so warm that you (people) can travel light in Okinawa, but I (we) think Hokkaido is better than Okinawa because you can enjoy playing various winter sports in Hokkaido.”

のように、相手の主張を繰り返し一旦受け止めた上で、こちらの主張を切り返すことができる。

debateの肝心要である「主張」を行う中では、やはり、weを主語とするよりも、youを主語とする方が、独善に陥らず相手に推奨しているニュアンスが出ていると思われるが、いかがであろう。

総じて学生にとって、一般論を述べる際、weの方を用い、youを使うことには違和感のようなものがあると考えられる。

そもそも、こなれた日本語では、一般論を述べる際には、「誰それが…する」とわざわざ主語を立てることは少なく、受身形にしたり「…については、〇〇である」という典型的な文型が用いられる日本語の言い回しがあることも、英語で一般論をいざ述べる際には、わざわざ主語、それも二人称のyouを立てて弁ずる必然性を実感できないのであろう。

英語で一般論を述べる際に用いられるyouやweに対して、我々日本語話者が感じる居心地の悪さの根本的な原因は一体何に由来するのだろうか。

1 本研究の目的と方法

そこで、本研究の題目を「人称代名詞youとweが内包するもの」— アメリカ文学の小説世界の語りの事例から — として、英語の人称代名詞youとweが小説のテキストのdiscourseの中で、どのようなニュアンス(=内包する意味合い)の下に使われているのかについて、考察をしてみたい。

とりわけ、現代アメリカ文学の古典の中で、特

異な「語り」のスタイルを持つWilliam FaulknerとJ.D.Salingerの小説中、人称代名詞youとweとが際立った使われ方をしている例を取り出し、小説のthe point of viewの観点から、ネイティブが持つyouやweのニュアンスを掘り下げてみたい。

なお、その際、youとweという人称代名詞の検討という点では避けることができない、「主語」という概念にも目を向けて、日本語と英語の「文構造」の違いについても併せて考察をしたい。

2 課題の所在

ここで、本研究でyouとweのニュアンスについて分析する際、その事例としてFaulknerの短編ミステリーRose for Emily及びSalingerの長編Catcher in the Ryeを選んだ理由を述べて、課題の所在を明示する。

(1) William FaulknerのRose for Emilyのwe

ミステリー小説ながら、Faulknerの優れた短編の一つに数えられる本書では、語り手の主語に、一人称複数weが選ばれている。

創元推理文庫のアンソロジー『短編ミステリーの二百年1』(2019)所収の「エミリーへの薔薇」を翻訳したのは、深町真理子である。

数多くの翻訳を刊行した経歴を持つ深町をして、「語り手の人称がWeである小説を訳したのは、記憶にある限り初めてです」と言わしめている。

同書の編者小森収は、巻末の詳しい解説で、ミステリーでは叙述形式(「語り手」の位置付け)が重要であるとの言説を述べている。

このことを念頭に置いてRose for Emilyの中で、weが一般論を述べるための総称人称として使われているのか、それとも特定の「我々」なのか、も含めて、どのようなニュアンスで「語り」の主体を務めているかを探りたい。

(2) J.D.SalingerのCatcher in the Ryeのyou

この物語は、主人公の少年Holden Caulfieldがyouに長々と語りかける一人称独白体で進む。そして、語り手のI(=Holden)の延々と長い「語り」に耳を傾けるyouは一体誰なんだろうか。

小説家の村上春樹が2006年に翻訳した際には、このyouにこだわって訳したという。村上はこのyouを単に「君」と訳しているが、本当にその訳得的を得ているのだろうか。小説に仕込まれた背景から考えて、もしかしたら、特定の人物ではなく、本論で筆者(=佐藤)の検証対象の一つである、世間一般の人を表す総称人称(Generic Person)としてのyouなのではないだろうか。

こうした疑問を解明することで、Holdenの「語り」の中で、youがどのようなニュアンスで「聞き

手」の役目を務めているかを探りたい。

II 本研究の意義と構成

1 本研究の意義

上記0はじめにで述べたように、英語によるdebateで一般論を述べながら議論を戦わせる際、学生の間で、youとweのニュアンスを十分に理解しないまま、若干の混乱と違和感を抱きながら、それぞれの主張の根拠について英語で述べている。

その違和感の所在の原因には、そもそも一般論を述べる際に、英語では必ず主語を立てることが求められるが、前述の0はじめにで述べたように、こなれた日本語では、一般論を述べる際、「誰それが…する」とわざわざ主語を立てることは少なく、受身形を用いたり、「…については、〇〇である」という表現を使うことが多いことが考えられる。

そこで、とりわけ特異なニュアンスで使われている英文の小説を敢えて選抜し、原書の英文をストーリー展開と場面とに応じて、できるだけこなれた日本語に移し替えていく「翻訳」という繊細な努力の入る作業に注目することによって、そこで使われている人称代名詞weとyouが内包する意味合いを明解に認識できるのではないかと考えた。

weとyouの内包する意味合いを探る上で、文法の説明を通じた単なる語義的な理解だけではなく、当該小説の翻訳者がその人称代名詞のニュアンスを把握・解釈して、どのように日本語に移し替えているかを詳細に検討するという、文脈と措辞との関係を読解する文学研究的なアプローチで、weとyouの内包する意味合いを解明するところに、本研究の意義があるのではないかと、と筆者は考える。

2 本研究の構成

本研究の論述を次のような構成で進める。

- (1) 文法書における主語youとweの説明の検討
- (2) 主語の立て方 — 日本語と英語の文構造や「物言う構え」の違いの検討
- (3) William FaulknerのRose for Emilyのwe
- (4) J.D.SalingerのCatcher in the Ryeのyou
- (5) 結論 — weとyouの内包する意味合いについての考察

III 研究結果

1 文法書における主語 you と we の説明

語り手の対局にいる特定の人物ではなく、世間一般の人を表す総称人称 (Generic Person) としてのyouとweについて、高校生・大学生等を対象とした英文法書では、どのように説明しているかを見てみたい。

(1) 「話し手」を含むか、含まないか

文法書として丁寧な詳述が特長的な、旺文社『ロイヤル英文法』(以下『ロイヤル』と略)では、まず、weについて、

話し手(自分)を含む人一般を表し、日本語に直すとき「我々は」などと訳さないほうが自然であるとしている。また、youについては、話し相手を含む人一般を表し、weよりもさらに口語的で、場合によっては相手を含まないで、話し手のことだけを述べる場合に用いられることがあるとしている。

更に、このyouの所有格yourには、「例の」という意味を表す悪いニュアンスで用いられることがあるようだ。

ちなみに、『ロイヤル』では、章を別に立てて、4つの「weの特別用法」にも言及している。

- ・著者・編集者のwe (Editorial 'we')
 - ・親心のwe
 - ・he, she の代わりに用いられるwe
 - ・話し手または著者の船・乗り物を指すwe
- もう一つの総称人称であるtheyについては、話し手と話し相手を含まない人一般を表すと『ロイヤル』は述べている。更に、「日本人は米を常食にする」という一般論を述べる際、誰が誰に向かって述べるかという状況によって、
- ・We live on rice in Japan. [日本人が(外国人に)言う場合] (かっこ内筆者)
 - ・You live on rice in Japan. [日本人以外の人が日本人に言う場合]
 - ・They live on rice in Japan. [日本人以外の人が日本人以外に向かって言う場合]
- と区別があるという。

(2) exclusive “we” と inclusive “we”

一方、「表現する視点に立ち英文法を体系化」という謳い文句で出版されたコスモピア『表現英文法』では、I, you, weなどの人称代名詞について、次のように説明している。まず、Iについては、

話している当人が自らを表現する際に用い、相手に言及する際にはyouを用いますが、「話す — 聞く」の立場が変われば、それは当然逆転します。と説明し、話し手—聞き手の間に対比関係が必然的であることを示唆している。youについては、

日本語の「あなた」は年下の者が年上の者に用いることはほとんどありません。…英語のyouは対話の相手を指す言葉であり、誰に対してであれ、均一に礼を失することなく使うことができます。…相手と自分の立場に関係なく使うことができます。

youは典型的には向き合った相手に向かって使

ますが、相手の出身地や生活の場に言及する場合にも主語をyouにすることがあります。

とある。更に、weには、

聞き手（側）を外してweとyouの関係における「私たち（側）」という意味を示すもの（exclusive “we”）と、聞き手（側）を含めて「私たちみんな」という意味を示すもの（inclusive “we”）があると説明した上で、

exclusive “we”の例文として、

We'll take care of our business, and you'll take care of yours.

inclusive “we”では、

We are all part of God's great family.

と、exclusive “we”においては、weとyouとの対比関係があってはじめて含意されることが分かる。

2 主語の立て方 — 日本語と英語の文構造や「物言う構え」の違いの検討

続いて、日本語と英語の文構造や「物言う構え」の違いについて、次の(1)、(2)の観点からまとめてみる。

- (1) 英語と日本語の文構造における主語の位置付け
- (2) 主語優勢型の英語と主題優勢型の日本語

その際、主として放送大学大学院文化科学研究科滝浦真人、佐藤良明 編著の『異言語との出会い』— 言語を通して自他を知る — の知見に依拠する。

(1) 英語と日本語の文構造における主語の位置付け

① 主語の立て方 — 日本語と英語の「物言う構え」の違いについて

『異言語との出会い』の「第14章 異言語としての日本語 (3)」を参照して、日本語と英語の主語の立て方について、論述していく。まず、

- ・人が知覚した何か（認知の内容）について述べる時、世界を自分とどう関連付けて捉えるか、逆に言うと、そのことを述べる「話し手」が自分自身をどう扱うか = 「物言う構え」を意識せざるを得ない。
- ・とりわけ、日本語では、話し手の主体である「わたし」や聞き手の「あなた」を言わない傾向があるが、そうした日本語の「物言う構え」は英語のそれとは対比的である。

と述べ、続いて、

日本は山が多い：

Japan 1 mountains 2 (are) many.

⇔ Japan is mountainous.

ジョンは足が長い：

John 1, legs 2 (are) long.

⇔ John is long-legged.

の対比に見られるように、

- ・英語は<SVX> 構造に基づき、主語全体にわたる特性を一つの形容詞で叙述して終わる。
- ・日本語構文は、異なる機能の主語を二重に許す。
- ・したがって、日本語構文の方が意味の伝達において効率がよく、科学的な諸概念を簡潔に操作する大きな力がある、という言語上の利点が日本語にはある。

以下で、もう少し詳しく「物言う構え」にかかわる言説をまとめておきたい。

② 日本語の「物言う構え」と主語との関係

ア「物言う構え」に影響する発話主体の現れ方

「物言う構え」について考える際、当然「物言う人」のことを考える必要が出てくる。

「物言う人」とは、日本語の場合、「わたし」、英語ならIによって指示される人物であり、発話主体にとっては「自分自身」のことでもある。

この人物は発話の際は、特別な意味合いを帯びる。それは、もし発話主体が「わたし」やIと言う場合、常に「自己言及」になるからである。

そして、世の中の何かを捉えて、その「認知」を説明するとき、「自分」を使ってその認知内容を「自分」とどう関連付けるかが問題となる。

したがって、発話主体が発話において自分自身をどう扱うかは、「物言う構え」に大きく影響するはずである。

同書では、主語の現れ方が物事を捉える姿勢 = 「物言う構え」に大きく影響する、日本語の主語の具体例を次のようにあげている。

すなわち、日本語の呼称詞共通の性質として、話すとき「私」を連発することが尊大な響きとなりやすく、逆に二人称は次第に軽卑的となり、このことは日本語母語話者の生活知として身に付いたものだと説明している。

イ 日本語は「主語の省略ではなく、わざわざ言わない」

更に、「日本語は主語の省略が多い」という言説は誤りであって、実際には、日本語は主語を表しにくい言語だと見るべきであると述べ、もし「省略」が成り立つのであれば、省略しない完全な形も問題なく成り立つと想定する必要があるが、「言わない」のが通常である主語を明示的に言うてしまうこと自体が、「強すぎる指示」としてのインボライト（失礼）な含みを慣習的に持つてしまうとしている。

日本語の場合、主語が明示される場合、それは単に述語に対する主語として置かれているのではなく、そこに何らかの対比的な文脈の想定があることを表すために明示されているのであって、一

方、単に述語に対する主語という以上の意味を持たない文脈では、主語はわざわざ言わないのであって、それは「省略」されるのではなく、言うことが「不自然」だから言われぬ、と述べている。

ウ 日本語話者は<見え>のまま話す

とりわけ、感情や感覚の表現では、意味的に見て、それらの知覚の主体である「わたし」は知覚主体にして発話主体を兼ねている。

このとき、発話主体が知覚主体である自分自身を言語化する場合と言語化しない場合とがあるが、それは、話し手が単に自分の抱いた感情や感覚を表現したいだけのときは、知覚主体が言語化されない方が自然で、一方、知覚主体が何らかの意味で他者と対比的に捉えられている場合、知覚主体が言語化される。

発話主体と知覚主体のこうした関係について、池上・守屋（2009）の、「日本語話者は<見え>のまま話す」という言い方の説明を引用している。

話し手が何かを言語で表現しようとするとき、自分自身も含めた場を外から（もう一人の自分が）俯瞰するようなスタンスと、その場の中にいる自分から見えるものを捉えるようなスタンスの両方が可能であり、「日本語における事態把握・言語化は後者のタイプに非常に強く傾斜して」いる。

この後者のスタンスにおいては、話し手自身は話し手の視界に入っていない。事態の中において臨場的・体験的に事態を把握する場合、現場にいる話し手の目に映った事態、つまり、<見え>を言語化することになり、見えないものは意識されず表現の対照にならない。「私」は観察の原点であって、把握の対象ではなく、「私」は見えない。

エ “見えないはずの自分”を言語化してしまう日本語学習者

日本語母語話者はこのような事態把握の仕方を自然に身に付けているが、学習者はそうではない。そこで、しばしば“見えないはずの自分”を言語化してしまい、不自然な日本語を話すことになる。

日本語では、道に迷ったときの質問の仕方でも、「私はどこにいますか？」は、日本語としては「ここはどこですか？」が自然であって、知覚主体である自分は言語化されない。「私はどこにいますか？」だと話し手からの<見え>の中に自分も入り込んでしまい、不自然な捉え方となる。

他方、英語ならば自然な表現は、

Where am I? の方であって、Where is this place? ではない。

日本語では、聞き手は確かに話し手の視野の中にはあるはずだが、日本語の話し手と共同主観的に談話を構成しようとする傾向が強いために「あなた」もゼロ化されやすい。

話し手と聞き手に対立的に向かい合っているのではなく、互いに自分の視点を相手に同化させるようにして共同主観的に事態を捉えるのであれば、対比的な文脈に「あなた」の言語化がしばしば不自然となるのも道理である。

これら「私」「あなた」についても、もし英語であれば'Iやyou'をはじめとする主語が明示されることになる。すなわち、英語における事態把握と言語化の仕方は、その主体が何かを知覚したり行為したりする様を話し手が言語化して捉えるスタンスであると言える。

(2) 主語優勢型の英語と主題優勢型の日本語

『異言語との出会い』では更に、主語の立て方から見た、日英の文の構造的な区別について、次のように説明を加えている。

- 英語のように「主述関係」を基本構造とする言語を「主語優勢型」、日本語のように題述関係を基本構造とする言語を「主題優勢型」と呼ぶ。
- 主語優勢型言語では、主語を立ててその主語と呼応するよう、二本立てで述語を立てる。
- 主題優勢型言語では、主題は主語ではなく述語に対する意味上のテーマにすぎないから、全体としては述語一本立てである。
- 発話主体が知覚主体である場合の事態把握の仕方を示すと、

[主語優勢型] の英語では、

I saw a cat and a crow glaring at each other.

[主題優勢型] の日本語では、

ネコとカラスがにらみ合っていた。

となる。

主語と主題の違いは通常、主語が文法的な要素であるのに対し、主題は、主題（＝旧情報）－叙述（＝新情報）という情報構造の中にある。

言わば、情報論的な要素と説明されるだろう。主語と主題の二つが“物言う構え”の二つの類型であることを念頭において、双方の言語の主語のニュアンスを繊細に捉える必要がある。

3 William FaulknerのRose for Emily のweについて

(1) Faulknerの語りの特徴

赤祖父（『フォークナー 現代史を生きる』、1977年）は、三大傑作の一つ『アブサロム！アブ

サロム!』が、相手の語りを聞く行為が定式的に重層構造をなしていることを強調している。

赤祖父が言う「重層」とは、一番外側の枠として第三者の静かな声があり、風景などを語り出しながら、いつの間にかそれが複数の主要人物の声とまじり合い、またそれから離れつつ進んでいく物語の語りの構造であろう。更に、主要人物達が語る八十年前の人物や事件と同化するという三重の関係を形作っていることを指す。ここでいう「第三者」とは、三人称で語る作者のことであろう。

赤祖父によると、フォークナーの作品の大半は、人々との語り合いのあがきから成り立っており、登場人物の独白といえども、虚空あるいは見えない他者、あるいはもう一人の自己との語り合いだといふ。

また、語りの構造が比較的明確な『八月の光』では、全編を通じて第三者(=作者)の声が強く響くが、これは天上から聞こえてくるのではなく、各人物の内部から発している印象を持つという。それは、作者の語りがまるで「共同体」そのものの声に化したように聞こえるという。

(2) Rose for Emily の語りの特徴

さて、短編小説Rose for Emilyは、どういう語りの構造を持っているのだろうか。

原文は短いものなので、どのくらいの数のweが主語に立てられているか数えてみた。全部で45個。その内、4個は台詞の中の具体的なweなので、残り41個が語り手としてのweということになる。

物語の文脈を追ってweを一つ一つ拾っていく中で、物語の後半に差しかかり顛末の流れが大きく展開するにつれて頻繁にweが出現する。

① weを物語の語り手に設定された理由

中西は、William Faulkner, “A Rose for Emily”の語り手“we”について(1997)で、Faulknerがこの物語の語り手とした意図を3点あげている。

ア 「歴史をよく知っている人」を語り手にすることによって、Miss Emilyのみならず、語り手自身も生きたアメリカ南部の小さな共同体ジェファースンの歴史を、この作品の背景に置いている。

一人称複数weの語り手がMiss Emilyの家の描写をおおして、アメリカ南部の小さな共同体に中に見られる時代の変化を背景とした事件の顛末を効果的に語り、この作品を南部の歴史に根差したものにしている。

イ 語り手の年齢層をMiss Emilyの次の世代、つまり、新しい世代と古い世代の過渡期に設

定することによって、この世代の人の眼をとおして、共同体の中の新旧様々な価値観を伝えることができている。

語り手weの語る事件が個人的なことではなく、ある世代を代表していることを表すため、“I”ではなく“we”にする必要があった。

ウ 共同体を襲う物理的な時代の変化を受け入れて生きている人々weと、そうした変化を受け入れずに身分や家柄に執着するMiss Emilyのような南部の旧家層の人々がいる。

こうした状況の中で、両者間の現実認識のギャップをおおして、時代の変化を拒絶し、受け入れられない南部の旧家の人達の苦悩を、共同体の大勢側の人々weの眼をおおして効果的に描いている。

ア～ウの説明によって中西は、語り手weが本小説世界の当事者たる位置付けであると言いたいのであろう。

② narrativeの語り手としてのwe

この「当事者である語り手」については、近年、narrativeというキーワードを用いて説明されることがあるのではないか。

小学館『日本大百科全書』によると、文芸理論の用語として「物語」を意味し、物語の内容(=story)と区別して、その語り方に焦点を当て、物語の構造、語り手の位置、語りが生み出す時間への「こだわり」を含んでいるという。

更に、英語教育にもっと物語文を活用すべきとの提案をしている山岡(2019)によると、

narrativeとは、文種(=text type)の一つで、日本語では「物語文」という訳語が充てられることが多く、文学としてのいわゆる「物語」だけでなく、事実的なエピソードの述懐など、何らかの出来事を主として時系列で語るものまで含む、より広い概念であるという。

更に、医療・心理やビジネスの分野では、より限定的な定義で「ストーリー=story」と区別して用いられることもあるとも説明を加えている。

③ 物語の視点と物語の語り手との関係性

また、中西は別の論文(2014)で、『「語り」の記号論—日英比較物語文分析〈増補版〉』(山岡實, 2006年)を引いて、物語の視点と物語の語り手との関係性について説明している。

山岡は、物語の「視点」(=point of view)と物語の「語り手」とを峻別すべきと提唱しているという。すなわち、

「視点」とは「物語世界の出来事・状況を物語世界の現場で『見ている』点」を意味し、それを

担う主体は「登場人物」である。

一方、「観点」とは「物語世界の出来事・状況を物語世界外から『見ている』点」を意味し、それを担う主体は「語り手」である。

また、「物語る声」とは「物語世界の出来事・状況を読者に伝達する媒体としての物語る声」を意味し、その声を発する主体は、「語り手」とであると定義する。

上記で述べられた、物語外からの「観点」で語る「語り手」こそが、Rose for Emilyの場合は、物語の舞台である共同体ジェファーソンを代表するweということになろう。

(2) ミステリーとしてのRose for Emily におけるweが内包するもの

ここで、I 2 (1) で既述した、創元推理文庫のアンソロジー『短編ミステリーの二百年 1』(2019) 所収の「エミリーへの薔薇」に関する、編者小森収の懇切な説明に注目したい。

小森は、「エミリーへの薔薇」は、フォークナーの書いたミステリーの中で最高傑作であり、そのストーリーは、叶わなかった恋物語 — それもグロテスクな結末を迎える恋物語であると規定した上で、更に、ミステリーでは叙述形式（語り手の位置付け）が重要との自説の一環で、「エミリーへの薔薇」の語り手として一人称複数、すなわちweが選ばれた理由を、次のように述べている。

すなわち、斜陽の名家の生き残りだった主人公エミリーを「ひとつの伝統であり、一つの義務、一つの厄介物」と感じていた、フォークナーの小説世界の町ヨクナトープ郡ジェファーソンの人々を決定的に対比する必要がある、エミリーにまつわる物語の出来事を語る人間（つまり、この小説の語り手）は、どちらに属するかを曖昧にすることはできない。エミリーは間違いなく（weから）孤立している。

そして、エミリーが長年町の人々に隠し続けた、結末で明らかにされる真実は、町の人々のひとりが語り手であるかぎり、したがって、物語の真相を全て知っている全能の作者自身が語り手ではないので、明らかに描きえない。そこには、ミステリーとして、何十年もの間に起こった出来事の陰に巧みに隠さなければならない作者の都合がある。

かくて、「エミリーへの薔薇」は、結末でついに明らかになった真実から、過去の事実を振り返ったとき、エミリーの恋心と、それが裏切られたときの動揺と、その動揺を毅然と押し殺したその毅然とした態度に思い至らせるといふ、巧みに構成されたミステリーであると同時に、その犯罪の陰に、多くの

感情を塗りこめた巧みな短編小説ともなっている。

本作の語り手weが内包するものとは、物語の視点からは、主人公エミリーとの関係性において、共同体の当事者としてのエミリーと対立的な存在であると同時に、物語の観点からは、ミステリーの語り手として、作者が読者に語って聞かせたい事件の真相と主人公の心の真実とを、結末に至るまで秘すための、敢えて「全能」としない存在という、二重の役割を担っていることになる。

4 J.D.SalingerのCatcher in the Rye のyouについて

(1) 「君」って、だれだ？

『ライ麦』のyouは、一体誰を指しているのか。

『ライ麦』には、野崎孝詔と村上春樹訳の二つの翻訳がある。とりわけ、村上の新訳に注目し、youの正体について、原作のyouが翻訳ではどのように日本語訳されているかを通じて考えてみたい。

翻訳は取りも直さず、原作の細部に至るまでの解釈の成果に他ならないからである。村上春樹が翻訳した際、このyouにこだわって訳したという。

この間の事情は、ポール・オースターなどの現代アメリカ文学を紹介している翻訳家柴田元幸との対談集『サリンジャー戦記』（文春新書）（村上春樹は全編、年下の柴田元幸を聞き手として、サリンジャーへのある種の敬意と思い入れを情熱的に語っている）で、次のように紹介されている。

村上 …『キャッチャー』の場合、語り手であるホールデンがyouに向かって語りかけているというかたちをとっているわけですね。そのyouなるもの＝語りかけられる存在をどういうふうに捉えるか、どこまで具体的に訳出していくかということで、文章の感じは結構違ってきます。作品のストラクチャーそのものの印象が変わってくるかもしれない。野崎さんの訳は、僕がおぼろげに記憶する限りでは、「君の」とかいう言葉はほとんど出てこないんじゃないかな。

柴田 そうですね、まあある程度は出てきますが、いわゆるうまい日本語訳のやり方で、できるだけ落とすというかたちになっていますね。

村上 僕はそれとは逆に、この小説におけるyouという架空の「語りかけられ手」は、作品にとって意外に大きな意味を持っているんじゃないかなと、テキストを読んでみてあらためて感じたんです。じゃあこの「君」っていったい誰なんだ、というのも小説のひとつの仕掛けみたいになっている部分もあるし。

柴田 それは、僕も村上訳を拝見していて思ったことですね。野崎訳のほうが、どちらかというと、

独りごとのなんですね。村上さんの訳は、ホールデンが誰かに語りかけている。でも、その語りかけているyouというのがどこにいるのかというのが、問題というか、すぐにはわからないわけですよ。そこは訳の違いとしてすごくおもしろいと思いました。

(2) 村上春樹の視点 = 「オルターエゴ」

デビュー作『風の歌を聴け』をはじめ『1973年のピンボール』『ノルウェイの森』など、一人称でずっと小説を書き続けてきた村上春樹にとって、『ライ麦』の一人称スタイルは小説を実作する上で、ある意味最良の手本だったのかもしれない。

(また、村上は、最初に小説を書き始めたとき、英語で書いていたと言う)

先にあげた対談のやりとりを読むと、村上春樹のyouに対する思い入れは、彼にとっては「小説」の在り方に対する自らの視点からくるものようだ。これは、あくまでも小説の実作者として視点であって、村上による翻訳という先入観抜きに『ライ麦』を読む読者の視点に立ったものではない。

続く対談で、次の「視点」が述べられている。

村上 … 本当はこの小説の中心的な意味あいには、ホールデン・コールフィールドという一人の男の子の内的葛藤というか。「自己存在をどこにもっていくか」という個人的な闘いぶりにあったんじゃないのかということなんです。

柴田 対社会的ではなく。

村上 対社会的ではなく。もちろんそれはあるわけなだけけど、それよりはむしろ、自分自身の意識状況とのせめぎあいというほうに、重みが込められているんじゃないか、という気がしたんですよ。だから、訳すときにも、そういう視点から物語の全体を眺めていくというところはありましたよね。視座の捉え方というか。

柴田 そうすると、「君」がどこにいるのかが大きな問題となる。

村上 そういうことですね。ひとつの考え方としては、「君」というのが自分自身の純粋な投影であってもおかしくないということです。それがオルターエゴ(もうひとつの自我)的なものであってもおかしくない。そうじゃないかもしれないけど、いずれにしても、そのへんの感触は大事なんじゃないかと。

(3) 筆者の二つの仮説

『ライ麦』の原文には、各章各パラグラフにyouを主語とする英文が散見される。たとえば、第11章では、

I certainly like to hear him play, but sometimes

you feel like turning his goddam piano over.

というセンテンスがあるが、このyouを主語とする現在形のセンテンスはこの場面の様子を即物的に説明するために使われているような気がする。

また、サリンジャーは度々、youを主語とする仮定法過去形(現在の事実に反する仮定を表す)センテンスで「youだったら～するだろう」とその場面に関する様子・印象・考えを表現している。

では、一体、'you'って誰なのか?

村上春樹の「オルターエゴ」説以外に、筆者が考える答えの候補を二つ挙げてみたい。

① you = 読者

かつて共に勤務するスコットランド出身のALTがたまたま熱心に『ライ麦』のペーパーバックを読んでいたことがあった。そのとき、ネイティブとしての考えを尋ねてみたことがある。

すると彼女は一言、“Nothing but a reader!”

ある意味、これが一番妥当な説かもしれない。『ライ麦』は読者に語りかける口語スタイルによって、読者を作品・物語へと次第次第に引き込んでいく。読者はまるで主人公の傍らにいて、ニューヨーク市街のあてどない彷徨に付き合っているような感覚を覚えるのだ。

すなわち、読者はyouと呼ばけられることによって、小説の中に自分も没入し「聞き役」という一つの「役回り」を引き受ける。

村上春樹の説とは逆に、何をやってもヘマばかりの主人公に対して、まるで「親友」のように感情移入することで、読者は主人公Holdenの中に読者それぞれの自分の「オルターエゴ」を見出すと言った方が、腑に落ちるのではないか。

したがって、日本語に翻訳された物語を読む上では、村上春樹訳のようにyouがことさら頻りに訳出されることで、主人公から「君」という人物に対して語った物語として、読者は「君」という、物語の中に組み込まれた役としてしかyouを見ざるを得ず、主人公と読者の間の関係性がある種のしぼりを受けてしまう。すなわち、敢えて主語を立てない日本語の文脈の中では、殊更、主語の「僕」「君」を声に出して述べることで、「対立」の相を呈し、物語の中での「僕」－「君」の対立的な関係性により、読者はホールデンの気持ちに没入できなくなるのだ。

村上春樹は、主人公が「君」と呼びかけることで自分の「オルターエゴ」を「君」の中に見出すと言っているが、これは翻訳という作業で訳者村上が聞く声であろう。日本語訳の物語を読む側からすると、村上の頭にあるエコーが響かず、訳者

の一人よがりになってしまう。

ここは、かえって「君」と訳出しない方がひょっとしたら、「翻訳」の中では読者の視点があちこち動くことで、主人公が思いを語り、言葉にする営みを通じて見出すかもしれない「オルターエゴ」を、読者はもっと体感できるかもしれないという皮肉な結果になってはいないか。

『ライ麦』の原書テキストのyouに戻ると、you= 読者と考えるのが、当たり前と言え当たり前前で少々平凡すぎて、面白みに欠けるかもしれないが、その一方で、『ライ麦』が持っている、決して軽視することができない魔力みたいなもの的一端はやはり、youを使った、読者への木霊のような語りかけに由来するのではないか。

② 二人称主語youを使った一般論化

柴田は、野崎孝訳について「いわゆるうまい日本語訳のやり方で、できるだけ（youを）落とすというかたち」だと指摘している。

この指摘はすなわち、「一般論」を述べるときに英語ではyouを主語とする場合があるが、日本語訳ではわざわざ訳出しくとも済むという、翻訳のセオリーを示唆しているのではないだろうか。筆者には、「you=オルターエゴ」説をとる村上春樹に対して、柴田元幸もまた「おいおい、そんなにおおげさに考えなくとも…」と暗に反論しているような気がする。

これと同様に、まさか村上春樹（英語で小説を書くぐらいだから、きっと英語の達人だと推量される）が、これまた日本語ではあまりなじみのない、英語で一般論化する際に使われる二人称youに過剰に反応しているのではないだろうか。その裏返しに、「you=オルターエゴ」などとあれこれ意味を付与するのかもしれない。

(4) マーク・ピーターセンによる、二人称主語youを用いる一般論

ここで、上記(3)②の仮説を補強するための知見をまとめておく。

筆者はかつて、岩波新書『日本人の英語』などで、日本人が陥りやすい英語使用のlocal errorsや微妙なニュアンスの違いに関する「目からウロコ」の指摘や示唆を与えてくれるマーク・ピーターセンの講義を聞いた際、次のような意味合いの説明があり、とても印象に残っている。すなわち、

一般論を英語らしい表現で述べようとするならば、youを主語にすると自然な英語となる。しかしながら、youを主語にすると、日本人はその一般論化の中に自分が含まれないと考えるらしい。そして、一般論を述べる際、日本人の英語では、youの

代わりにweがよく使われる。

長年の付き合いがある親しい日本人の友人と話していて、何かの話題について、一般論のコメントがその友人の口から“We are inclined to …”などと言われると、言った本人はそんな意図はないと思うが「（外人のあなたは違うが、我々日本人は）…だ」と言われたような気にさせられる。

外国人の自分と日本人の間を突然高く乗り越えられない壁で隔てられたような気がして、悲しい気になる。

たぶん、日本人は、「一般論」化した見解・意見表明をyouを主語にして述べると、そのコメントを聞いた相手にその見解に関する責任の所在を一方的になすりつけてしまうことになると思込んでいるのであろう。

マーク・ピーターセンは、岩波新書『心にとどく英語』の「Ⅲ 会話にスパイスを」の中で「2 youはyouでも「あなた」じゃない」という章を設けて、「話し言葉」の英語で一般論を述べる際に主語にyouを立てることについて、次のように述べている（下線部と括弧内は補足のため、筆者が付した）ので参照されたい。

一般論は思いやり

… 具体的な問題から一般論に変換する目的は、一つには何らかの不都合を紛らわせるということが多いが、他にも（思いやりを込めることができる）便利な使い方がある。…

… 一般化した方が親切な場合もあるのだ。あるいは、人を直接責めるのを避けるための使い方もある。日常生活にはこういった場合が多いが、ほとんど無意識的に使われている。…

一般論は、自慢話にならないようにと使われるケースが特に多い。…

日本語の便利なところとして、主語さえ省けば、このような一般化ができるのだが、英語のセンテンスは、主義を「数式的」に必要とする。英語では何らかの主語がないと、センテンスが成り立たないのである。youは比較的カジュアルな感じだが、より改まった印象のoneを使うこともある。…

また、peopleやpersonなどという言い方もあるが、統計的には、何より先に述べたyouが多い。

… 一般論に使われるyouに馴染んでいないと、二人称のyouとの区別に困ることもあるようだが、多くの場合、現在形がヒントとなる。…（この後、theの付かない複数名詞「一般論化」の目印になるとも述べている）

以上の「話し言葉」の英語で一般論を述べる際、主語に使用されるyouに関する、マーク・ピーター

センによる説明は、一人称口語体、すなわち、主人公の独白を「話し言葉」で述べた『ライ麦』に頻出するyouについて考えるとき、示唆に富む。

すなわち、『ライ麦』に頻出するyouについて、「一般論化のyou」説を採るならば、日本語で訳出する場合は、野崎孝訳のようにさっと流して、殊更訳さないのが翻訳のセオリーだろう。

(5) youによる「一般論化」説からみた物語

ここで、youによる「一般論化」説を基に、物語の視点(=point of view)について整理し直す。

① 一人称Holdenと一般化youとの関係

主人公Holden = 作者サリンジャーは、一人称で「物語」を「語り」進めながら、時折、Holden自身の意見や感想をyouを用いたセンテンスを使って一般論化することで、カジュアルな雰囲気を保ちながら、独善的 = 一人よがりにならないように配慮していると考えられないか。

小説自体は書き言葉で、文字に書かれたyouに殊更眼が向いてしまうが、物語のpoint of viewは一人称の「話し言葉」である。

まず、「一般論」化とは、自分の意見や感想から一歩引いて、少し控えめに表現することである。小説のpoint of viewという「視点」に立って言い換えると、主人公は物語の展開の要所要所を、youによる「一般論」によりbird view = 「俯瞰」的に読者と一緒みていることになる。

更に、このyou = bird viewという考え方から、youを訳出するか否かということを考えてみると、『ライ麦』における主人公Holden-you-読者の関係性が明確になるような気がする。

筆者は先に、youを「君」と訳出しない方が、主人公の「オルターエゴ」が体感できるかもしれないと書いたが、このオルターエゴについて、タイトルの訳出からも考えてみよう。

② 『ライ麦』のタイトルの訳出の違い

村上はどうして、The Catcher in the Ryeをまるで、芸のない最近の洋画のように『キャッチャー・イン・ザ・ライ』とそのままカタカナのタイトルにしたのだろうか。

村上と違って、youを「君」と訳出しない野崎は「ライ麦畑でつかまえて」と付けている。

この「つかまえて」は、いわゆる「～しながら」ではなく「～してほしい」とも取れる。

このタイトルは、あえて端的にまとめると、将来の目的を見出せないHoldenが、ライ麦畑の中で無邪気に遊ぶ子どもたちが崖下に落ちてしまう危機から救う'Catcher'になりたいという夢を幼い妹フィービーに話して聞かせることから来て

いる。「すべての子どもたちが、今の自分のように、途方もない深みに落ちてしまわないようにしてあげたい」というのが、主人公の夢である。

しかしながら、野崎孝訳のタイトルは、『ライ麦畑でつかまえて』と、本来の意とは主客が転倒して、Holden自身がyouに向けて「自分をつかまえてほしい」という願望を込めたようなタイトルとなっているのだ。このタイトル付けは、野崎孝がホールデンとyouの二重性を読み取った上でのものかもしれない。

『ライ麦』は、アイデンティティを確立し切れていないHoldenが、青春の葛藤の中で自身と向かい合う心の彷徨の物語と考えるならば、彼が語りかけていたyouはやはり「君」ではなく、村上春樹の主張する「オルターエゴ」=もう一つの自我、自分自身であったのかもしれない。

したがって、だからこそ、youを訳出しない野崎孝訳の「聞き手不在」こそが、村上春樹の読み取りである「you = オルターエゴ」をよりの確に日本語として伝える翻訳となる。

野崎訳には、「物語の読み取り→youを訳出しない翻訳スタイル→タイトル付け」に一貫性があると言えるのだ。

ここまで考えてくると、上記(3)①の「you = 読者」説と②の「二人称主語youを使った一般論化」説の双方とも、『ライ麦』におけるyouが誰なのかという疑問を照らす光源として意味するところはあまり変わりなくなってしまう。

(6) 第三の仮説：'you' = カウンセラー

ここまでずっと物語のpoint of viewから『ライ麦』のyouについて考えてきたが、物語の具体的な「設定」から、「youが誰なのか」を再考する。

① Holdenがいる場所

物語のシチュエーションとして、今、Holdenはどこにいるのか。滔々とyouに向かって語り続けているのはどこなのか。その答えは、ずばり「病院」である。第1章の冒頭(下線部筆者)、

I'll just tell you about this madman stuff that happened to me around last Christmas before I got pretty rundown and had to come out here and take it easy.

と述べて、Holdenは療養のために「ここ」へ来ていることが分かる。

しかも、物語の主舞台であるニューヨークではなく、信頼する兄のD.B.が働く、暖かい西海岸ハリウッドの近くで療養しているらしい。そして、来月退院できると期待している。

Holdenが療養しているのは、寒さ厳しい冬の

ニューヨークを三日間あちこち彷徨った挙げ句、物語の終幕の第27章で、突然降り出してきた雨の中、妹のフィービーがメリーゴーランドに乗ってぐるぐる廻る様子をずぶ濡れになりながら、まるでライ麦畑の‘Catcher’のごとく見守ったために、肺炎か何か（最後の方は、自分は下痢気味だと告白している）にかかったからだ、これまで筆者は捉えていた。

② Holdenの話し相手

最終章にも、何で「療養」しているかは具体的には書かれていない。ただ、よく読んでみると、気にかかることが書いてある。（下線部筆者）

A lot of people, especially this one psychoanalyst guy they have here, keeps asking me if I'm going to apply myself when I go back to school next September. It's such a stupid question, in my opinion. I mean how do you know what you're going to do till you do it? I think I am, but how do I know? I swear it's a stupid question.

Holdenは療養している「病院」で、一人の精神分析医にかかっていたのだ。そして、いろいろと質問されて、居心地の悪さを訴えている。

但し、この精神分析医は、それが明かされるセンテンスに続いて、youを主語とするセンテンスがあり、かつ、Holdenが全く信頼していないというコメントからすると、この精神分析医 = youでは、どうやらなさそうである。

しかし、ここが「心を癒す」病院であれば、複数のカウンセラーがHoldenの周りにいても少しも不思議ではない。youが特定の「あなた」かもしれないのだ。

ところで、このyouはどう訳せばいいのだろう。日本語の自然な文脈に添って訳出すとしたら「先生」となるのではないか。

このyouなる人物は、ホールデンの脈絡のない語りに当惑しているのか、呆れ果てているのか、それとも同情のあまり何も言わないのか、『ライ麦』の中では一切説明されていない。そして、ホールデンの一方的で勝手な話にも何も突っ込まずに黙って聞いているのだ。このyouという人物の態度こそは、まさにセラピスト、カウンセラーのそれであろう。

2019年11月来阪し、兵庫県芦屋市の朝日カルチャーセンターで「J・Dサリンジャーの声」と題して、柴田元幸氏が『ライ麦』について講演を筆者は聴講した。最後の質疑のコーナーで、『ライ麦』のyouの正体について質問をした。

村上と同じく「超越的な存在」であるという考えで一致して安心したと柴田は答えたが、更に重ねて、筆者は一般論を述べる際のyouではないか、それとも、Holdenが入院している療養施設のセラピストではないのか、と。そうすると柴田は、Holdenはこのyouをどれほど信頼しているのか考えてみる必要があると答えた。

度重なる「面談」によって、初めは壁を作っていたHoldenが次第次第にyouに信を置き、物語の後半、心の襲を具体的なエピソードとともに語り始めているのではないか。mindではなく、soulを見せ始めていると言ってもいいだろう。

③ Salingerと心理セラピー

更に言えば、『ライ麦』は、サリンジャー自身が1945年に発表した、短篇 *I'm Crazy* を敷衍した内容であると言う。筆者はこの『ライ麦』のおおもととなったこの作品を読んではいないが、Holdenという主人公の設定はどうやら、「心の病をかかえた少年」であることは間違いないであろう。（さかんに麦芽ミルクばかり飲んでいるので、背伸びしているが、このこと一つをとっても、非常に子どもっぽいことが分かる）

実際サリンジャーは、第2次世界大戦中、欧州戦線に派遣され、ドイツとの激しい戦闘によって精神的に追い込まれていき、ドイツ降伏後は神経衰弱と診断され、ニュルンベルクの陸軍総合病院に入院したことがあるようだ。

村上もまた、先の柴田元幸との対談の中で、次のように述べている。

村上 僕が翻訳で読んで記憶しているの『キャッチャー』は、高校生の男の子が、わりに神経症的で、というか若者的に純粹で、社会の偽善性みたいなものと闘うとか、大人の価値観に刃向かって苦しむ、悩むとか、そういう印象が頭に強く残っていたんですね。それが野崎さんの訳のせいなのかどうか、それとも僕自身のそのときの個人的な読み方によるものなのか、今となっては正確な判断がつかないわけだけど…

村上は更に、『ライ麦』の展開を「地獄めぐり」と呼んでいる。

村上 … 結局この話は、ホールデンがニューヨークに出てからは、一種の地獄めぐりみたいな構成になっていますよね。でも、その地獄というのは、巨大都市という現実的な地獄でありながら、そのままホールデンの、そしてつまりはサリンジャーの、魂の内側の暗闇でもあります。…

確かにHoldenは、『ライ麦』を物語ることで自ら癒しを与え、その結末で、自分の心の投影

(村上春樹も指摘しているように)でもある物語の登場人物を懐かしがり、「赦し」の心さえ抱いている。彼はこのように述べて物語を締めくくっている。

If you want to know the truth, I don't know what I think about it. I'm sorry I told so many people about it. About all I know is, I sort of miss everybody I told about. Even old Stradlater and Ackley, for instance. I think I even miss that goddam Maurice. It's funny. Don't ever tell anybody anything. If you do, you start missing everybody.

(5) 『ライ麦』におけるyouについて—総括

持留(2014年)は、心理学の知見に基づきなHoldenの語りを分析しているが、そこには、大人の世界に対する自己認識から自分の繊細な心を守るための「自己欺瞞」が見られると述べている。

語りが自己欺瞞に満ちているということは、基本的に人と人の相互理解などというものはあり得ないというニヒリズムの現れであり、人と人は分かり合うために語り合うわけではなく、また、語りは、真実を伝えるためではなく、語り手にとって有利な世界を作り出すための行為であり、Holdenは欺瞞という武器を使用しているというのだ。

Holdenは、自分に有利な世界の中へ、自分に都合のいいように「聞き手」を誘導しているつもりであっても、誘導される側の「聞き手」も黙って誘導されるままになっているとは考えにくい。語りに隠されたもろみを暴くべく、心を読み解く能力も同様に進化する。

『ライ麦』のような、一人称の語りによる物語には、語りをめぐる力学のダイナミズムが激しく展開していると述べ、youが上記(6)の説のカウンセラーに擬せられる「聞き手」であると同時に、(3)①の説の「読者」であるという、両説を止揚するような形で、Holdenの語りについて説明している。

いずれにしろ、『ライ麦』のyouには、一筋縄ではいかない意味合いや役割が内包されている。

いかなる小説も、書き手は読者に対して、いわゆるpoint of viewや人物設定、語りの構造に工夫を凝らしてミステリーを仕掛けてくる。

『ライ麦』においてSalingerは、この二人称代名詞'you'によって、ときにはカウンセラーのような聞き手、ときには内面の声、そして、またあるときは「読者」(読者一人一人がまるで自分に届けられているような気持ちにさせる語りを聞く者)の立場を並立させ、吉本隆明の用語を借りるならば、ただ単に相互に対立し合うだけでなく相互に侵食し合う「逆立」

の関係性を持った、多義的で複合的なnarrativeを成り立たせていると考えられる。

IV 考察— weとyouの内包する意味合いについて

これまでの論述を、英語と日本語の文構造における主語の位置付けの視点から、簡潔にまとめ直してみたい。

日本語の語りでは、日本語で話し手と聞き手が対立的に向かい合っている場合を除き、「私」「あなた」はわざわざ言語化されない。

日本語話者にとってはしたがって、ただでさえそれを述べる主体が曖昧な「一般論」を主語優位な英語で表現する際、主語に何を立てるかという問題に直面する。

一方、英語におけるweとyouにおいても、discourseが対立的な否かで、その内包する意味合いがweとyouの関係性において相互に、相手を含む(=inclusive)か含まない(=exclusive)かの立場を取る。

したがって、主語を一々立てる英語の語りにとっては、とりわけ、論理よりも象徴を重視する小説世界などでは、FaulknerやSalingerの語りで見たとように、一つの主語が複雑で多面的な振る舞いをする。言わば、mindを用いてただ単にstoryを追うだけでは辿り着けない。

主人公のsoulは、これもまた英語の直読・直解では計り知れない、文構造の違いから来る日本語—英語間の翻訳の薄皮を通してしか見えてこないと考えられる。

更に高等学校段階のreading指導に目を向けると、山岡大基(2019年)が述べるように、教科書で採用されるテキスト・タイプは説明文に過度に傾斜する傾向があり、題材(subject matters)の新奇さばかりが追求され、多様なテキスト・タイプに触れるよう配慮が少ない。指導者側も、説明文の論理構成に固執した内容理解に終始しがちである。

また、人称代名詞weとyouとが、どんな場合には特定の人を指し、どんな場合には世間一般の人を表す総称人称(Generic Person)なのかの使い分けの、実際のdiscourse上の事例に、我々日本の英語学習者はあまり遭遇していないことが考えられる。

例えばdebateの中で、主張のスピーチをするための読み原稿を書く作業は、英作文である。スピーチの準備をする話者がnative speakerでない限り、英作文とはすなわち「英借文」であり、実際の英文の中から、いわゆる「言語の使用場面と働き」に応じた適切な表現を抜き出して来るしか、術はないのである。

一方、大学入試等では、個人的な体験談を書かせるようなwritingの問題も今後益々出題されることが予想されるが、解答の「見本」となるようなナラティブ・テキストに教科書の中で触れることが少なくなり、学習の指針を得ることができていない。

V おわりに

Active Learningに基づき対話的な学びの中で、英語で議論を行うとき「一般論」を述べ合うことは、決して避けて通ることができない。

今後、一般論を述べる適切な文構造について、英語文の適切な主語を立てるという視点から、具体的には、日本語話者である学習者が、世間一般の人を表す総称人称 (Generic Person) としてのyouとweを使いこなすことができるよう、効果的な指導の手立てを検討してみたい。

更に進んで、新学習指導要領が学力の一つとして求める「表現」の力を、「相手の立場に立って、相手が分かるように表現する力」、加えて、「相手の立場に立って相手の意図や思いを理解する力」を合わせた総合的なコミュニケーション能力とするならば、英語によるnarrativeに基づくdiscourseについて、日本語と英語を往還しながら、両者の主語の立て方や文構造、“物言う構え”を切り口として英語教育で積極的に活用する指導法の開発についても、今後取り組んでいくべきであろう。

引用・参考文献

- 滝浦真人・佐藤良明編著 『異言語との出会い』ー 言語を通して自他を知るー 放送大学教育振興会 (2017年3月)
- 赤祖父哲二著 英米文学作家論叢書 『フォークナー 現代史を生きる』 冬樹社 (1977年11月)
- 小森収編 『短編ミステリーの二百年1』 東京創元社 (2019年10月)
- 中西典子 関西学院大学 人文論究 William Faulkner, “A Rose for Emily”の語り手“we”について (1997年2月)
- 中西典子 立命館文学 三人称の語りについての一考察: William Faulkner の“Dry September” (2014年1月)
- 山岡大基 広島大学附属中・高等学校 中等教育研究紀要 ナラティブの力を英語教育に (2019年)
- J.D.Salinger *THE CATCHER IN THE RYE* Penguin Books (2010年)
- 村上春樹訳 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』 白水社 (2006年3月)
- 村上春樹 柴田元幸著 文春新書 『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』 文藝春秋 (2003年7月)
- マーク・ピーターセン著 岩波新書 『心にとどく英語』 岩波書店 (1999年3月)
- 持留浩二 佛教大学文学部論集 ホールデン・コールフィールドの語りにおける欺瞞 (2014年3月)
- 佐藤雅之 奈良県高等学校等英語教育研究会2010紀要

サリンジャーのYouについて (2010年5月)

● 佐藤雅之 西大和教育研究会論文 日本語と英語の文構造の違いに関する考察ーWriting 及びReadingの学習指導の観点からー (2020年8月)